

「子どもは 小さな哲学者」

ガレス・B・マシューズ著

鈴木晶訳 思索社

「主人が訳しました。楽しいですよ。」と、友人がこの本を送ってくれました。読みすすむにつれ、「そうだ、そうだ、子どもの頃は誰だって、ごく自然に、自由に、哲学することを楽しんでいたのに、〃社会化〃とか、〃常識〃がこの楽しみを奪っていく。誰もが『どうして？』と万物に疑問を感じていた時代があったのに、〃学ぶべきこと〃にすりかわってしまう。大人になるって何だろう。」と考えさせられる。

娘が二歳になったばかりの頃、自分のことを「ボク」「オレ」といつていた。ある日、「みづぎちゃん女の子だから、ボク、オレじゃなくて、ワタシでしょう。」と教えてくださった方がいた。すぐさまみづぎのいうには「オレナノ、ボク ト オレ ト ワタチハ オンナジヨ。」

先日も、一人で排便、排尿できるようになった娘がトイレから大声で叫んでいる。「オカアサン！ ウンハ イシダネ!!」

いずれの時も私は「みづきってすごいね」としか言葉が出なかった。著者は、このような子どもの発言に含まれる、哲学的思考の芽を私達に示してくれる。

子どもの質問や、発見に、すぐ「教えて」しまう時がある。そのすぐ後で、あの質問はもっと深い意味があったのではと気づく。

私自身の社会化、常識化されたものの見方、考え方を子ども達から、ゆさぶられつつけたい。

マサチューセッツ大学の哲学科教授の著者はいう。『認識の発達の研究をした(略)心理学者ピアジェが、幼児の哲学思考に対して敏感でないとしたら、いったいだれが敏感なのだろうか。他の発達心理学者ではあるまい。教育理論家でもないだろう。(略)たいいていの子どもはごく自然に哲学の問題に興味をもつものだけだということを理解した、唯一のおとなは、童話作家達である。少なくとも何人かの童話作家である』と。